

変身ヒロイン悪墜ち報告書2 催眠洗脳で正義の味方をメス化調教
ケース・ジュエル・ブルー、ふたなりケモノ化改造計画

偽りの記憶い偽りの恋人 レン視点

僕の名前は八島蓮。親友のノノからはレンちゃんと呼ばれてたりする。スタッフの人からはレン君と呼ばれることもあるけどれっきとした女の子だ。

「もう、レンちゃん。いくら今日は予定が無いからって……ん」

僕の表向きは学生だけど、悪の組織が現れた時は正義の変身ヒロインとしてこの町を守る仕事をしていたりもする。ちょっと前にこの町で活動していた悪の組織は壊滅させたから今は待機の身だけだね。

「すんすん、だってノノの匂い好きなんだもん」

「うー、あーっーいー」

それでも、学業や正義の味方の組織、ジュエル・スターズでのトレーニング、定期ミーティング、定期健診などなど同年代の女の子に比べて忙しいスケジュールなのでたまの休日にだれるのはゆるして欲しかったり。……おかしい。

「ふふ、そういういながら抵抗しないノノも結構うれいんでしょ？」

「この大耳ジゴロめ。はいはい、今日は一日何にもない日だからね」

ノノもジュエル・スターズの一員と一緒に戦う仲間だ。ジュエル・スターズの寮を出てノとルームシェアを初めて大体2週間ほどたった。……あれ？

「尻尾をそんなに振って、ほんとレンちゃんは私の匂い嗅ぐの好きだよね」

何かおかしい。けどまあいいや、さすがに他の人の前で友達の体の匂いを嗅ぐとか恥ずかしくてできないからこういう時に補充しておかないと。

「ノノは僕の耳や尻尾、どう思う？」

僕はいわゆるデザイナーベイビーというやつで、最初から悪の組織のような人類の敵と戦うように設計されて生まれてきた。僕の体には数十体の幻獣の遺伝子が埋め込まれて、僕の意思でそれを表に出して超人的な身体能力、通常の動物ではありえない特殊能力を使うことができる。

ノノも魔法少女に変身する能力をもっているけどそれは一年ほど前、後天的に手に入れたもので、それ以外は普通の女の子だ。その違いはどうしても気になってしまっう。

「かわいいよ。犬みたいで」

「もうー！」

普通はできるだけ獣の部分が出ないように抑えているけど、完全には抑えきれしていない。せめて見た目がましなイヌ科の耳と尻尾を出しているけど、どうしても自分は他の人と違う生き物だと疎外感否めない。

「あはは、でも、本当にかわいいよ？　きれいで真つ白な毛並みで先っぽがちっと青みががってるのも私は好きだよ」

ノノに好きといわれて心臓がドキッとしちゃう。変だ。いや、おかしい……でも何がおかしいんだろう？

「それじゃあ、もっとノノの匂い嗅いでもいいよね？」

「え、や、ちよつと、そこおしり！？　スカート越しに！？　ひや、ハウス！　レンっちゃうんハウス！」

「はふ、ノノの甘い匂い、ここがとっても濃い。ずっと顔をうずめていても飽きない」

「ええい！？　おのれは発情した犬か！　もう、いい加減にしないと……」

「いい加減にしないと？」

「おそっちゃうよ？」

「きや！？」

にっこり笑ったノノにひっくり返されて、カーペットの上で馬乗りに押さえつけられる。おかしい、おかしい、おかしい、おかしい、おかしい。なのに、この状況が当たり前と認識してしまう。

「ふふっふ、レンちゃんが悪いんだからね。私もスイッチ入っちゃったから止まらないよ？」

そう言つてノノは股間のギンギンにそそり立ったおちんちんを……

「なっ！？　なにそれ！？？」

「え、おチンポだよ？」

ガキン、と金属がぶつかつたようなガラスが割れたような音が頭の中で響く。おかしい、全部おかしい！？　そもそも、ルームシェアなんてできるわけがない。ノノとは親友だけで友達以上の感情は持っていないし、つく、そうだ、悪の組織もまだ壊滅していない。

「ノノは普通の女の子で、そんな……ものをつけているはずがない！」

「えー、私、魔法少女だよ？　で、魔法でにゅっと生やしてみました？」

ノノはいつもの笑顔で笑っているけど、今はその顔がとても不自然で見ていると寒気がしてきた。めのまえのこれは危険だとわかってしまう。

「つく、誰だお前。ノノじゃないな！？」

「えー、ひどいなー、ノノだよ。レンちゃんの恋人の御船ノノ。もう、2週間一緒に住んで……」

耐えきれなくなつて馬乗りになつてゐるノノの姿をした何かを突き飛ばす。

「オプト・ムーンか？　いつから、うつ、なんだ、記憶が……」

「あーあ、まあ、今回はお遊びみたいな回だから失敗するのはわかつてたけど思ったよりも早かつたね。さすが、ジュエル・スターズ」

ノノの姿をした何かはぼんぼんと服の埃をはたくしぐさを見せて何事もないように立ち上がる。それと同時に、視界の端から今まで居た部屋の風景がほつれて消えていく。まるでゲームのように数秒でシェアールームと思つてゐた部屋は消えて真っ白な空間だけになる。

「なつ、ぐ、ひゃあああ！？　あ、ああああ、んん、ひゃ！？？」

「あ、ごめんごめん、初期化してる最中にレンちゃんの実体の感触まで戻しちゃった」

「つぐ、あ、え？！」

強烈な痛みや快感が体に走つてゐたのは一瞬だったけど、え、現実の体？　まだ、頭にもやがかつたように記憶が混乱している。

正義の味方はあつてゐる。ノノとは親友。ボク達、ジュエル・スターズは現在、悪の組織オプト・ムーンを追い詰めてゐる最中で、

【ジュエル・ブルー…八島連は御船ノノの匂いが好き】

うん、ノノとは親友だからたまに体に密着して匂いを嗅ぐくらいで、恋人とかルームシェアとかそういう関係ではない。

「よし、今回はこれくらいでいいか。もうちょっと進んだらいっぱい楽しもうね」

「待て、逃がさないぞ！？」

ノノの姿をしたものを攻撃するのは抵抗あるけど、あれは逃がしちゃいけない。

「あはは、それはこつちのセリフだよ。レンちゃん。まあ、逃げることは無理だけどね。それじゃあ、またね」

前と同じように体が凍つた氷のように動かなくなり……前？　あれ？　何か忘れて……今日は確か2週間ぶりのミーティングでみんな集まつて、つく、ノノは無事だろうか……

ジュエル・スターズ…ジュエル・ブルー捜査報告書1

国家公認非公開組織のジュエル・スターズ所属、メイン隊員の一人。自身に保持されている遺伝子から状況に応じて変身するタイプを制御できる獣人型。

生まれる前からオーバーテクノロジーで遺伝子を調整された超人計画の被験者。ほぼ怪人と同種の存在だが使用されている技術が一段階上で性能、能力も桁違いである。能力は遺伝子の底に眠っている幻獣の能力を引き出し、活用するもので汎用性がかなり高い。ジュエル・スターズとの戦いで最も損害が出ているのがジュエル・ブルーとの戦いとなっている。ブラック・フォビュラスからの機密情報によるとブルーの能力で感覚の遮断、体内、肌の表面である種の治療薬による瞬間再生、緊急時に致死性の高い毒素を生成して自動防衛も可能なので籠絡した場合は注意、専用の機器が必要と考えられる。

幻獣の因子は専用の拘束帯で表に出ないように制御しているが効果は100%ではなく、耳や尻尾などに幻獣の特性が出ていて完全な人型になるのは不可能な模様。平時は光学迷彩で耳や尻尾などを隠している。

なお、首元にブルーガーネットのブローチを付けているが、これは能力とは関係なく御船ノノからプレゼントされた市販の品である。

これらを考慮して敵本拠地に潜入中のブラック・フォビュラスを中心にした籠絡、洗脳作戦を考察中である。